

目 次

緒言

I 外部評価委員会

1. 外部評価の概要	1
2. 外部評価委員名簿	2
3. 外部評価委員会開催日程	3
4. 本校出席者名簿	4
5. 議事	
(1)開会挨拶	5
(2)委員長の選出	6
(3)学校側からの概要説明	7
(4)質疑応答及び提言	8
(5)講評	20
(6)閉会挨拶	24

II 評価結果報告書

1. 評価点	25
2. 意見・提言及び本校の回答	26

III 説明資料

I 外部評価委員会

I 外部評価委員会

1. 外部評価の概要

(1) 目的

佐世保工業高等専門学校における教育研究活動等の状況について、外部の有識者による意見、提言を受け、本校の教育研究体制等の改善を目指すため、外部評価委員会を開催するものである。

(2) 外部評価の実施方法

外部評価は、各種資料及び口頭説明に基づき評価を受ける。

① 実地調査(外部評価委員会)

本校において、学内関係者からの口頭説明ののち、質疑応答及び意見交換の上、外部評価委員から講評を受ける。

② 外部評価委員による評価結果報告書の作成

上記の調査に基づき、外部評価終了後、外部評価委員に評価結果についての報告書を作成していただく。

(3) 評価項目

各概要説明内容、全7項目について評価を受ける。

(4) 外部評価報告書の作成

外部評価委員会の結果及び外部評価委員から提出していただく評価結果をとりまとめ、「外部評価報告書」を作成し、公表する。

(5) 外部評価委員会委員

別紙のとおり(9名)

(6) 外部評価委員会開催日時

平成21年3月17日(火) 13:30-16:30

(7) 開催場所

佐世保工業高等専門学校 一般教科棟1階 多目的教室

外部評価委員名簿

区分	職名	氏名
大学、高等専門学校等 高等教育機関の教員等 及び経験者	九州大学工学部長 (九州大学大学院工学研究院長 工学府長)	◎末岡 淳男
	長崎県立大学長	池田 高良
本校の所在する地域の 教育関係者	長崎県立佐世保工業高等学校長	松山 秀則
地方自治体の関係者	長崎県北振興局長	高尾 潤
地域産業界の関係者 (地域産業支援組織)	(財)長崎県産業振興財団佐世保事業所長	永田 安夫
	佐世保重工業株式会社 人事部長	・津 忠
	株式会社亀山電機 代表取締役 社長	北口 功幸
報道機関の有識者	(株)長崎新聞社 佐世保支社長	才木 邦夫
本校卒業生の代表者	佐世保工業高等専門学校同窓会会長	朝永 憲法

(外部評価実施要項順 敬称省略)

注) ◎印は委員長

外部評価委員会日程

1. 日 時： 平成21年3月17日（火） 13:30～16:30

2. 場 所： 佐世保工業高等専門学校 一般教科棟1階 多目的教室

次 第

時 刻	摘 要	備 考
13:30～	外部評価委員会開会 ○校長挨拶（趣旨説明） ○外部評価委員紹介 ○学校側出席者紹介 ○配布資料確認	
13:40～	○議事 1. 委員長の選出 2. 概要説明 (1)佐世保高専の概要について (2)学生（本科）の教育について (3)専攻科の教育について (4)学生生活について (5)学生の寮生活について (6)地域連携及び産学官交流について (7)広報活動について	説明者：校長 説明者：教務主事 説明者：専攻科長 説明者：学生主事 説明者：寮務主事 説明者：総合技術教育研究センター長 説明者：広報委員長
15:20～	休憩	
15:30～	3. 質疑応答及び提言	
16:00～	4. 外部評価委員による講評	
16:25～	閉会	
16:30	校長挨拶 散会	

本校出席者名簿

所 属 等	氏 名
校長	井上 雅弘
教務主事（自己点検・評価委員長〔校長指名〕）	須田 義昭
学生主事（自己点検・評価委員）	牧野 一成
寮務主事（〃）	福田 孝之
専攻科長（〃）	武富 敬
機械工学科長（自己点検・評価委員〔校長指名〕）	原 要一郎
電気電子工学科長（〃）	長嶋 豊
電子制御工学科（学科長代理）（〃）	重松 利信
物質工学科長（〃）	下野 次男
一般科目長（〃）	田崎 弘章
総合技術教育研究センター長（〃）	久留須 誠
広報委員長（〃）	古川 徹
情報処理センター長	
図書館長	松尾 秀樹
学生相談室長	堂平 良一
キャリア支援室長	稲永 善数
JABEE対応委員	
事務部長（自己点検・評価委員〔校長指名〕）	川崎 信之
総務課長（自己点検・評価委員）	松永 義成
学生課長（〃）	三原 和宏

(1)開会挨拶

[井上校長]

佐世保高専の井上でございます。本日はお忙しい中を外部評価委員を引き受けていただき、本校の評価委員会にご出席いただきましてありがとうございます。

最初に、この外部評価につきまして、少し趣旨をご説明いたしたいと思えます。

私どもかなりたくさんの方の評価を受けておりまして、これは、この十数年いろいろな組織が全部評価をしなければいけないという話がございます、これは評価文化の弊害などと言っておりますが、私どももその例にもれませんが、まず「高専教育としてきちんと行われているかどうか」ということ、機関別認証評価。これは、大学評価・学位授与機構から受けております。平成14年度の教育改定項にしたがって認証評価が始まりまして、高専につきましては平成16年度執行。平成18年度に私どもの審査は終わっております。

2番目としましては、「専攻科教育の実施状況に関する調査」というもの。これも大学評価・学位授与機構がございまして、これは専攻科に進みますと学士を出すことができますので、学士レベルの教育を行っているかどうか、そのカリキュラムとそれから教員の資格があるかどうかということを受けることになっております。私どもは平成9年に専攻科を作りましたもので、その5年後に審査を、さらに5年後ということで平成19年度に審査が済んでおります。

それからもうひとつ、「技術者教育認証」これはあのJABEEということで御存じのかたも多いと思えますけれども国際レベルの技術者教育がなされているかどうか。JABEEというのは日本技術者教育機構でございますけれども、国際的なABECのなかに入っております、そこで決められた基準の教育がなされているかどうかということでございまして、私ども平成16年度に受審いたしまして、5年間の認証というものをいただきましたけれども、これが今年で切れますので、平成21年度受審する予定ということで準備を進めております。そういうことで、高専教育としてそれから学士相当の学生をだすということとし、それから国際レベルの技術者教育ということで評価を受けている。そのほかに、自主的といいますか教員の表彰これはFDの一環として行っておりまして、先生方の自己評価、先生同士の相互評価、学生による授業評価ということを含めまして、検証をしております。特に、高専機構というのが、国立高専を統合する機構がございまして、そこでの賞をいただくことで、平成17年度、19年度は、うちの若い先生方が高専機構の奨励賞をいただいておりますし、今年度は理事長賞をいただくということになっております。

あと、独立行政法人としての高専機構が毎年受けなければいけない事業年度評価がございまして、このための資料を提出する。これは、私たちが直接評価を受けることではございません。ただ、そこに出す資料が高専機構の中で評価されませんと次の予算に影響するということで、これにもかなり神経を付けております。

それから、最も私どもが重要視しているものが外部評価でございます。これは、いわゆ

る、社会の目から見て「佐世保高専はどうか」ということですね。そういう趣旨でございます。

この「社会の目から見てどうだ」ということに関しまして、評価という話ができただけから平成5年の3月ぐらいに佐世保高専の現状と課題という自己点検と評価に向けてということで3代目の青木校長のときにこういう評価書を出しております。それから、前校長の根本校長のときにグローバルスタンダード時代における個性的技術者教育ということで、やはり自己点検・評価報告書を出しております。しかし、完全に外部評価委員会になりましたのは、平成15年のときに出しました報告書に従って、16年3月に外部評価委員会が開かれた。これも、前校長の根本校長のときにやられております。平成16年の4月に独立行政法人のなかに入りまして、そのなかで、第一期中期目標・中期計画というものをたてたわけでございます。それが平成16年から20年。それが丁度本年度で終わりになります。そういうことで、法人化してからのこの5年間を一度みていただきましょうということで、今日、外部評価委員会をお願いしたわけでございます。

本来ならば、もっと膨大な資料をお送りすべきだったかもしれませんが、委員の先生方は、非常にお忙しい中を資料ばかりたくさんお送りしても…と思ひまして、今日は、担当のいろいろな報告の後、自由に意見をいただければと思います。

佐世保高専を育てるといふあたたかい目でもって、御意見をいただければと思ひております。ひとつよろしくお願ひします。

(2) 委員長の選出

委員の互選により、末岡委員（九州大学工学部長）を委員長に選出した。

学校側からの概要説明

質疑応答に先立ち、本校関係者からスライドを用いて、佐世保高専の概要について次のように説明があった。

①佐世保高専の概要

井上校長より、高専制度及び高専教育の特徴、佐世保高専の沿革・組織、教育理念、および中期目標・中期計画等について説明があった。(説明資料 P. ～ P.)

②学生(本科)の教育について

須田教務主事より、本科の教育目標、入学者選抜、教育課程、卒業後の進路等について説明があった。(説明資料 P. ～ P.)

③専攻科の教育について

武富専攻科長より、専攻科の中期目標、教育体制、教育課程、中期目標に対する主な改善事項等について説明があった。(説明資料 P. ～ P.)

④学生生活について

牧野学生主事より、学生生活に関する指導・支援体制、学校行事、学生会活動、学生相談、奨学支援等について説明があった。(説明資料 P. ～ P.)

⑤学生の寮生活について

福田寮務主事より、学寮の役割、概要、入寮状況、寮生会活動、施設・設備及び改修状況、安全対策等について説明があった。(説明資料 P. ～ P.)

⑥地域連携及び産学官交流について

久留須総合技術教育研究センター長より、設置の基本方針、組織、連携・協力状況、課題等について説明があった。(説明資料 P. ～ P.)

⑦広報活動について

古川広報委員長より、自己評価、ホームページの改善状況、広報印刷物・広報ビデオ、イベント等について説明があった。(説明資料 P. ～ P.)

(4) 質疑応答及び提言

では、これから、外部評価委員によりまして、いろいろな自己評価・点検報告書などの説明に基づきまして、いろいろな議論をしていただこうと思っております。

全体的にお聞きしても、難しいと思いますので、説明がありました項目ごとの個別に区切って議論を進めて、後で講評をお願いするということにしたいと思います。

まず、第一に「学生（本科）の教育について」の内容につきまして、質問等なども含めながら議論を進めていきます。外部評価委員の方、よろしく申し上げます。

[末岡委員長]

退学者と留年者が、進学率的なところで、高専の中で一番優れているというところを見せていただいて、退学者と留年者が少ないということなので、あえて言うことは無いのですが、確かめたいのは、説明された時に、1年生の時に「創造実験・創造実習」をしている話がありましたが、これがうまくいっていると自負されているところの根拠を説明して頂けないでしょうか。

[須田教務主事]

留年者・退学者が少ない理由と創造実験・実習を行っていることに関係あるかどうかを説明いたします。

創造実験・創造実習というのは、下級生から入れて、専門に対してははじめから興味を持ってもらうということで、電気工学科であれば、PCを組み立てたり、基本的な、その学科に興味をもってもらうということでやっております。

そのことでも、効果があるかどうかについて数値があるわけではありませんが、留年者・退学者につきましての、きめ細かな教育ということで、本校におきましては、他高専に比べては、一番大きく違うのは、年4回試験がありますが、これに対応して、追試験を毎回行っております。

かなり、教員の先生方には負担があると思いますが、これを毎回行って、また、そこでクリアしないとダメということを行っているようなきめ細かな教育を行っていることが、大きく関係していると考えます。

それと、委員が言われた、1年における専門に興味を持たせるということが、退学者の減少にどれほどつながったかは、わかりませんが、学科に対する興味を持たせることが減少の一因になったのではないかと考えております。

[委員]

まず、佐世保高専の概要というのがありますよね。そこで述べられた、学生数ですが、1年次の4学科が173名。2年次で162名。その差が、11名あります。他の資料（本科教育

の p.21) の退学の数と同じになりますか？

[須田教務主事]

その 2 つは、異なりまして、退学者・留年者というのは、1 年から 5 年を合わせた数でございまして、学生数の 173 名と 162 名の差というのは、各学科の定員がございまして、43 から 45 名ほどの合格者を出しておりますので、学生数の差として出てきています。

学年に関して、1 年から 2 年への進級時に留年する学生は、だいたい、1 名いるかいないかぐらいになっております。

やはり、3 年から 4 年に上がるときに、一番、方向転換することが多くなっております。

学年によって定員が異なっておりまして、今の 2 年が受検したときは、辞退者もいたことから、40 名ほどの人数が入学しております。

したがって、学生数の 173 名と 162 名の差が、そのまま退学者・留年者ということではありません。

[委員]

それと、もう 1 ついいでしょうか。

各学年 160 名程度の定員ですが、その中の出身者の、例えば、長崎県出身者が何名だとか、佐世保が何名だとか、他の地域が何名かなどのデータがあれば教えていただきたい。

[須田教務主事]

手元の資料にはございませんが、だいたい 7 割ほどが長崎県内出身者になっております。

あとの 3 割弱が佐賀県出身者で、若干名がその他の地域となっております。これは、長崎県・佐賀県内に高専が 1 つしかありませんので、ほぼ、長崎県と佐賀県内から来ています。

福岡、大阪などの他の地域からも、若干名来ております。

それと、長崎県内でも佐世保市が一番多くなっております。比率的には、佐世保市が 4 割ほどです。

[末岡委員長]

かなり、地域性があるということなんですね。

今日の資料では、各学科別ではなくて、全体としてのデータとなっておりますので、特徴が見えにくいというのがあるかもしれません。そのことを含んで、質問されたように思います。

[委員]

昭和 61 年に、厳しくご指導いただきまして、佐世保高専を卒業いたしました私ですけれど、そのときの恨み節を言うつもりは、まったくありませんので、あくまでも外部評価委

員として意見を述べますので、聞いていただければと思っております。

さきほど、留年者数・退学者数がありまして、率がよいというお話がありましたけれど、私がいたところに比べますと、ものすごくよいという気がしています。

逆に、留年者数・退学者数が少ないというのは、基準が甘くなっているのではないのかと心配をしてしまいますが、何%がよいという判断はつきませんけれど、資料では、留年者の数が 8 名しかいないというのが、率直に言うと、ゲタが高くなっているのではないかと感じてしまうのですが、いかがでしょうか。

[井上校長]

私の方から、少しお答えいたします。

教員側からすると、「ゲタは履かせていません」となりますが、昔は、高等教育機関としての誇りというものが非常に強くて、「高等教育機関なのだから、自分で勉強するものだ。付いてこれる者だけが、付いてくればよい」というものが、既知の教育だったと思います。

最近では、大学を含めて大衆化・ユニバーサル化しておりまして、入ってきた者をいかに生かすかということが重要となっておりますので、教育方法はずいぶん変わっております。

まあ、ゲタは、私が会議に出て状況を聞いている限りには、非常に厳しくしているように思います。

[須田教務主事]

JABEE がありますので、そういった意味で、evidence 証拠書類として残しておかなければいけないといったことがありますので、前よりも厳しくなっております。

年 4 回の試験について、問題・解答・模範解答等は保存されていますし、各教員がゲタを履かせているのが判れば、大変なことになりますので、前よりも厳しくなっておりますけれども、毎回追試を行うなどのきめ細かい指導、校長先生が言われたように、以前に比べて 2 倍、3 倍の仕事を教員が行っている、学生に勉強させているということが言えると思います。

[末岡委員長]

サービスがよくなったということですね。

[委員]

我々が卒業したころは、即戦力となる中核技術者の育成ということが高専設立の目的で、「お前たちは、学校を卒業したらすぐ現場に出てやっていかなければならないんだ」ということを叩きこまれながら、卒業していきましたけれども、近頃、ものづくりの現場から離れる若者がだんだん増えてきているということと、ものづくりそのものの評価が以前と

随分変わってきていると感じております。

そのような状況で、学校として、どのようなところを注意しているのか、学生に教育されているのか、もし、ありましたら、お教え願います。

[井上校長]

就職する割合で、ものづくりの道に進んでいる者とそうでない者について、追跡調査をしたデータがありませんので、今後、調査をすべきだと思いますけれども、私ども佐世保高専としては、ものづくりに重点を置いた教育、実験実習の教育に力を入れていきます。

ただ、ミスマッチの問題もありますので、最優先に私が考えるのは、学生は自分に適した職業を選ぶべきであることだと考えております。

昔は、「職業教育というものは、専門教育で。だから、高専は技術者を育てるところなので、残らず技術者にしよう。」という、考えでありましたけれど、プロフェッショナル教育ということから逆に、キャリア教育というものを中心に、学生一人一人が卒業した時に社会に役立つような人間にする。もし、合わなければしょうがないということです。

特に、私が最近感じますのは、これは、感じて申し上げたらいけないのかもしれませんが、化学系のエンジニアというのは、高専レベルが卒業しても、即、大手の企業に役立つまでにはいかないようです。そうすると、進学するしかないわけです。中途半端になってしまう。そうすると、本学で卒業する学生は、化学から離れた職業に就くということが、少し増えてきている感じがします。

これは、化学系の先生方が違うと言われるかもしれませんが、化学系の先生方、いかがでしょうか。

[下野物質工学科長]

高専は、製造現場での中核技術者を育成するというところで、そのへんの基本的なところは、方針を与えてなくて、化学系の物質工学科ですけど、製造現場・生産現場のところで、中核工業技術者ということ働いているということは現状そのものなんですけども、さきほど、校長先生が言われましたように、やはり、技術が向上しておりますので、高専に入ってきて、更に、いろいろ勉強してみて、更に高度なことを勉強してみたいという学生が、おそらく、増えてきていると思うんですね。

ですから、物質工学科の場合には、就職希望者と進学希望者は半々ぐらいとなっております。

[委員]

先ほどの説明の就職数のところ（学生（本科） p.38）で質問したいのですが、よろしいでしょうか

求人数はこれだけありますが、就職したい学生が何名いるのかがわかりづらかったのと、

地元就職率が高いと説明がありましたが、実際には、就職する学生は数人程度で、地元で全く就職していないような気がして、問題ではないかなと認識しているのですが、そのような感覚が若干異なるような気がしています。この点については、どのように考えられているのかということと、問題があるのは、先ほどお話がありました、佐世保高専の場合、佐賀を含めた地域での高専ですので、地元というのは、佐賀県を含めたうえのことだったのか、そのあたりも含めて、ご回答いただきたいと思います。

[須田教務主事]

だいたい、学科によってばらつきがありますが、物質工学科以外は40名程度の学科5年生で6割が就職、物質工学科では4割が就職となっております。学校全体では、だいたい5割の就職となっております。

地元就職、これには県知事、地元の県や企業からも非常少ないと指摘されておりますことは、事実でございます。10%から20%を超えていないということで、もともと、本校が設立された目的のなかには、地元で優秀な技術者を残すということがあります。

しかし、私は、九州全体を”地元”と考えて評価をしております。これは、中学生への学校説明会から引用しておりますが、九州内で就職できることをPRしております。

確かに、長崎県、佐賀県も含めて就職者が少ないのは事実であります。

さきほど、長崎県との連携推進事業を説明しましたが、地元で20%、30%学生を残そうということで、今回、県内の工業高校の校長先生と本校の教務主事室、各ワーキンググループで検討しまして、推薦制度を設けて、その学生たちが地元に残った場合には、県が50%奨学金を援助するというので、今回、この推薦制度を利用した4名の学生は、本校を5年で卒業した後は、県内企業に就職したい、奨学金を受けるとの面接時の話ですので、このような形で増えていくのではないかと考えており、このような取組みから地元への就職を増やしていく試みを検討・協力しているところであります。

[委員]

その件で、県内の求人数のパーセントにもよることかと思いますが、例えば、平成19年度だと720社から1712名の求人数が出ていますが、このうち、県内はどれくらいかということはわかりますでしょうか。このことも、県内に就職できるかどうか変わってくると思います。県内求人がそもそも少なければ、就職する人も少ないことも考えられますがいかがでしょうか。

[須田教務主事]

企業数について、厳密な数値がわかりませんが、県内からもかなりの数の求人が来ております。しかし、申し訳ございませんが、いろいろな待遇などで大手企業に行きたいと思う学生が多いのが事実だと思います。

辻産業から「ぜひ、欲しい」として求人がありますし、最近、大島造船には毎年 1 名づつほど就職しています。あと、推薦制度の協定には入っておりませんが、三菱重工にも複数名が就職しております。

推薦制度の協定は、地元の”中小”企業と協定を結んでおりますので、地元でも大手企業ならば奨学金は出さないと県の方が言われております。地元の中小企業に就職した者を優先的に援助するというものです。この内容を理解した上で、工業高校のトップクラスの生徒が、推薦制度を利用して高専に来ておりますので、あと、2年ほどは増加していくのではないかと期待しております。

[末岡委員長]

スライド p.37 を見ますと、大手の企業ばかりですね。

地場産業などが、就職先の例として挙げられないということが、ちょっと寂しいかなという気がします。

ちょっと時間が押していますので、次に進みたいと思います。

次は、専攻科の教育についてです。

何か、質問等ございますでしょうか。

[委員]

今、経済産業省あたりは、特に IT 関係で、天才を見つけようというようなことを奨励していますよね。結局、IT 関係は起業もしやすいのではないかと県の方でも考えていますが、飛び級制度というものは、高専ではありませんか。

[須田教務主事]

飛び級制度というものは、残念ながら高専にはありません。

[委員]

機械とかものづくりの方は、なかなか_____にくいでしょうけど、ITの方は、東京にいるいないにかかわらず、地方にいても起業しやすいのではないかと、条件はイーブンだというふうに考えれば、頭抜けた学生が出てきて、起業して欲しいなというのが希望としてありますが、いかがでしょうか。

[武富専攻科長]

まだ、専攻科が出来て12年目ということで、その成果が出てないといった部分は有りませすけれど、本科の電子制御工学科ということでお答すれば、若くても会社の社長になっているなど、IT系でそのような卒業生もいます。

ただ、運営と研究力という能力に違いがありますので、難しいことだと思っております。

[末岡委員長]

そこは、難しいところですよ。

研究ができて、商売はできないということもありますので、それに、高専ですから大学との結びつきというのがありますし、飛び級制度というのは難しい制度になると思うんですね。どこに入れられるかというの、憲法で決まっておりますし、出口が無いということになりかねないかもしれません。

私の方からも一つ。

技術士の一次試験合格というものが免除されるということで、かなり合格者が増えたという説明がありました。総合試験とかそういうものもございますよね。学生さんにとって、技術士の一次合格というものが、将来にどのように結びついていっているのでしょうか。

[武富専攻科長]

専攻科を出れば、技術士一次試験と同等なのです。

[末岡委員長]

そうです。JABEEを受けてらっしゃいますからね。

[武富専攻科長]

JABEE に対応しております、複合型ものづくり工学の総合試験というカリキュラムの試験は、6回に分けて行われるような、かなりハードな試験です。質を保证するために。だから、言うならば、総合試験を受けなくてよいと、ということなんです。

[末岡委員長]

逆、ですか。

[井上校長]

もう一つよろしいでしょうか。

JABEE を受けますと、これは、融合分野でとっておりますので、一次試験の合格によって応用理学部門という3専攻に縛られない技術部門での資格が取れるということです。

そこで、技術士一次試験の専門科目で、たとえば、電気電子工学科だったら電気、機械工学科だったら機械というような試験に合格すれば、同等レベルとして、対応する専攻科の総合試験と免除をできるようにしており、学生は、その時間を節約して、卒業研究などに時間を使うことができます。そういう、意味合いがございます。

2 : 45 : 29

[末岡委員長]

なるほど。そういうことですか。

[委員]

ちょっと、専門外のところがありまして、つい、大学と比較をしてしまいますけれども、感想から申し上げますと、非常にまじめな学生が丁寧に育てられているなど強く感じます。先生方も大変、御苦勞されておられるように感じます。

ただ、大学の場合ですと、途中退学する学生もかなりいますし、卒業時にまだ自分の進む方向が見えていない学生もおります。こういうことと比較してみると、どこがいいのかはまだわかりませんが、一つは、大学の場合は、ほとんど全寮制ではありませんで、アパートに住んで、アルバイトをしていると思います。

アルバイトというのは、可能でしょうか。もし、おられるなら、どれぐらいの割合でしょうか。

私は、社会体験という意味でアルバイトというものは、社会性を育てるという意味で良い面があると思っており、生活指導等と係ると思いますけど、御意見を伺わせてください。

[牧野学生主事]

アルバイトについて、お答えします。

本校の場合、1年生の15歳から専攻科となると22歳までいるわけですが、1年から3年まで、いわゆる、高校生世代に関しては、高校に準じるような形でアルバイトに関していうと、原則禁止しています。ただし、夏休み及び春休み等の長期休暇の間に関して、健全なものであれば、学校が認めるということにしております。一部、3年生まででも、長期の休みでアルバイトをしているものもおります。

4年、5年に関しては、学校側できちんと把握していません。だいたい何名ほどがアルバイトをしているか、十分把握しているわけではありませんが、たとえば、ハウステンボスに行くと、うちの学生を見かけたりすることもあります。

クラブ活動をやっていない学生は少ないですが、4、5年生については、アルバイトをやっていない学生はけっこういます。

学習に支障が出るものに関しては、認めません。深夜にあたる、とかですね。

[末岡委員長]

ひとつひとつ、項目ごとに分けて話をしようとしていましたが、バラバラになってきましたので、これ以降は、どういうジャンルでも構いませんので、御意見をお願いします。

[福田寮務主事]

先ほどのアルバイトの件に関しまして、学寮生でもアルバイトを行っているものは、おります。

点呼は 20 : 30 ですが、この時間を超えてアルバイトをしたいというものがおります。基本的に 4、5 年生ですが、家庭教師をしたいなどです。

22 時を限度として、許可しております。今、だいたい 20 名ほど登録しており、週何回という制限の中でアルバイトしておる学生がいます。

[委員]

工業高校あたりでは、マイスター制などのようなものの一環として、近場の中小企業などに行って、溶接やヤスリがけ等の作業をしておりますけれど、高専ではそういうことはどうでしょうか。

[須田教務主事]

インターンシップの形で、4 年生のときに、1 週間から 2 週間行っております。全国の高専でもトップクラスのほぼ 100% 近い学生が参加しております。それも、できた当初からやっております、以前は、必須の単位としており、必ず参加しないと卒業できないことにしておりました。

一時期、オイルショック等で受入企業がなくなったということで、あるときから選択科目にしておりますが、現在でも、ほぼ 100% 近い学生が、よっぽど時間の都合がつかない場合以外は、自分たちで企業を決めて、東京、九州内などのいろいろな企業にインターンシップを行っています。

このことで、自分の就職先にした学生もおります。就職する学生の内、3 分の 1 ほどがインターンシップ先に就職希望を出しております。

[末岡委員長]

インターンシップは単位になっていますか。

[須田教務主事]

インターンシップは、選択科目の単位としています。

[末岡委員長]

ほかに。

[委員]

英語が弱いということが言われますけど、論文など発表されていて、英語で結構書かれていると思いますが、基礎能力は高専学生にはあると思います。ただ、自分たちがいかにして表現するか、話していくか、コミュニケーションをとるかという部分がちょっと弱いのかなという気がします。

よそからも言われたことがあります。高専の学生に英語をしゃべれといってもしゃべら

ないひとが多いと。

その部分では、今後、こういった取り組みを考えておられるでしょうか。

[須田教務主事]

英語科の先生がおられますので、回答をお願いします。

[末岡委員長]

教員には、ものすごく立派な方がおられるという説明がありましたね。

よろしくお願いします。

[松尾図書館長]

例えば、TOEIC などの公的な機関のスコアからすると、高専の学生が低いというのは事実であります。

大きいのは、大学入試が有る無い。これは語彙力の問題で、これが違うというのは否めません。ただ、近年、専攻科生に関して言えば、かなりプレゼンテーションを練習しております。相当、専攻科生のプレゼンテーション力は高まってきていると思います。

専攻科の1年のときに、ネイティブの先生の授業がありまして、英語でプレゼンテーションをして評価をするものがある。私も、毎回、最後の授業に参加していますが、かなり上手です。

ですから、必ずしも、スコア的に出ておりませんが、TOEIC のスコアが高くないのは、大学入試と大きく関係があると思います。しゃべれるかということに関していえば、大学生とも遜色ないかなと思います。

1年から5年まで選択科目で、ネイティブ独自の授業もありますし、これは、高校生よりも多いと思いますし、卒業生などに聞くと、外国人が突然来たときに、他の人はたじろぐのに、そうでないことが多いということも聞いたりしますので、点数的には出てませんが、実際の場面では、役に立っていることが多いと思います。

今後としまして、個人的には TOEIC のスコアを上げていかなければいけないと思います。

[須田教務主事]

補足しますと、専攻科の修了条件で TOEIC のスコア 400 点というものがありますので、英語科はかなり頑張っておられます。

今後のことになるのかわかりませんが、中国に4年生51名を連れていきましたが、向こうの学生と交流するために、向こうには日本語学科の学生が多かったといっても、英語でコミュニケーションすることが多くて、帰ってきた学生の感想を見ると、英語の必要性を身にしみて感じたとか、モチベーションが上がった等の意見がありますので、若いうちに海外へ連れて行って、空港でもどこでも英語を使わないと食事もとれない、そういった

経験をさせることが、語学の大切さに繋がっていくので、こういうことも続けていきたいと思っています。

2 : 55 : 24

[末岡委員長]

簡単をお願いしますね。ちょっと、時間が押しております。

[委員]

はい。

ここで、推薦入試というのがありますよね。いわゆる、AO入試とは違いますよね。申し訳ありません。素人なもので、高専の入試にAO入試制度は、あるのでしょうか。

[須田教務主事]

本校では、AO入試制度を設けておりません。

AO入試を設けている他の高専もありますので、話を聞いたり、調査を行っていますが、本校では利用しておりません。

内申書の点数4.1という条件と面接ということです。

面接の時に、例えば、クラブ活動を頑張っていたら、点数が上がるかもしれませんが、それだけを見て、合格を決めることはしておりません。

[委員]

会社で総務の仕事をしていたことがあります。どこでも一緒でしょうけど、入試などで、結構、各中学校の「おりこうさん」が来ると思います。確かに、「おりこうさん」ですけど、実際に話してみると、マニアックと言いますか、そういう子ども達が多いですし、ですから、中には、まだ15歳ぐらいですから、「基準に到達してないが、秘めたものがある」というような、子ども達もいるという気がします。

ぜひ、その辺にも工夫をして、幅広くみてはいかかかなと思いますが、どうでしょう。

[須田教務主事]

わかりました。

選抜の方法について、特徴のある学生について、現在、成績の部分だけで取っていることがありますので、面接でそのようなことも考慮するように検討していきたいと思います。

[委員]

私は、前長崎大学学長の齋藤先生と同じロータリーで、いろいろとお話を伺いまして、どういった話が聞けるのか、大変興味をもって、楽しみにしていました。

法人化されたとあって、経営的な感覚というものが必要になってくるのかなと思いまし

て、それで、佐世保高専の評価としまして、どうしても国立高専機構があるので難しい部分があるかとは思いますが、売上でいくと、国からくるのが10億弱、あとは、助成金等にとってこられるのが1億弱ぐらい。合わせて、11億ぐらいかなと。

それを、どのように経費の配分をして、あとは、寮の方で設備等を新しくした話等もありましたが、どのような経費の使われ方をしておられるのか。

それと、資産価値についてですね。よく、長崎大学などでは、資産価値など使われますけども、広い敷地のなかで、工作機械も入っているみたいですが、そのような資産といったものも、経営として、他の高専とかと比較するうえで、重要なファクターになってくると感じます。

あと、広報ですね。

古川先生に直接言うのは、ちょっとあれなんですけど、企業とすればマーケティングがあって、プロモーションがあって、セールスという流れがありますけど、マーケティングは難しいと思いますが、プロモーションとして広報・宣伝のところですね。

非常に良い内容のところもありますし、古い内容も掲載されておりましたので、佐世保高専の良いところを、もっと上手にアピールしてほしいと思います。

とりあえず、以上です。

[末岡委員長]

あとで、また講評の方でも、よろしくお願いします。

(5) 講評

[末岡委員長]

普通だったら、もう、終わりそうなんですけど、今から、外部評価委員の方々には、1人、3分から5分ぐらいの時間で、講評をしていただこうと思います。

では、よろしくお願いします。

[委員]

何を言おうか、ちょっと迷っています。

まず、評価委員会の説明を受けて、そのプレゼンテーションが素晴らしいなということから、先生方の学校の評価に対する思いというものがしっかりしていらっしゃるという点で、そういった意味での評価は素晴らしいと思っております。

このような背景には、しっかり、教育研究がなされていることの裏返しだと私は感じております。

今、お話があったように、独立行政法人になりましたら、経営という感覚を持たなければいけなくなりましたが、特に、全寮制という、子どもを預かっておられるということで、経営ということは難しいであろうと思います。

全体として、学生への対応が非常に丁寧にやっておられるなということが、一番の感想としております。

以上です。

[委員]

いろいろと説明を聞いていて、半分は予想のつく回答でありました。

ただ、全寮制、5年間の教育という利点があるはずですよ。

昔の中学校の5年間。あの5年間。高校からですけど、中学校入って、高校1年の15歳のとき、20歳の先輩がいたら、先生が注意するよりも20歳の先輩が言った方が効き目があるはずなんですよ。そういった部分の利点とかメリットをもっと使ってもよいのではないかと感じております。

間違えば、大変なことになりますけど、それで、佐世保高専の伝統、初めにできたときの伝統というものを作らなければいけないのかと思います。

工業高校からみると、5年間というのは、大変うらやましい限りです。3年間で出ますので、1回、学校が崩れると立て直すのに3年から5年はかかります。

そういう意味でいうと、どこかでそういうものができればよいなと、話を聞きながら感じておりました。

あとは、佐世保工業も地元に残すように言われております。では、地元に残すためには何なのかというと、正直な話、私は中学校に言いますけれど、「大手企業に行けます

よ」という宣伝をします。「それぐらいにも行けますよ」と言います。そのようにして学生を集めます。高専さんもそうだろうと思います。

そのなかで、地元に残すためには何をすればよいのか、地元子ども達が目を向けるにはどうすればよいのか、ということは、考えていかなければならないと思います。

そういう意味で、久留須先生がやられているような、産学官交流とか、我々も参加しますが、地元の企業さんと呼んでほしい。これ、してますけど、これとは別に、職員は職員で別に、地元企業、SSKなり、佐世保重工なり、いろいろなところに行きます。

そういうエネルギーが、佐世保工業と佐世保高専と役所などが、バラバラにエネルギーを使ってないか。まとまれないか。それが、佐世保の活性化につながるのではないかと、実は、思っております。

以上です。

[委員]

さきほどから、丁寧に学生さんを育てられているというのは、私も同感であります。

私どもが、中学の時代を考えますと、学校で13クラスありまして、トップの生徒が佐世保高専に来ていました。そのころの印象からすると、非常に、話を聞いていますと、トップが行っているが、窮屈な生活をしているという感じが付きまっております。今まで、そういったイメージでございましたけれど、こちらに来ましてから、校長先生とお話をしまして、そういう生活面あたり、時代とともに、女子生徒も入っておりますし、上手に対応してこられたのかなと思います。

かつては、高専というと、教養の単位あたりは、なおざりといった言い過ぎですが、技術ばかり磨いているというイメージでしたけど、1年生あたりは、9割近くが一般教養ということで、やっぱり、時代とともに変わってきておられる。

そのあたりのイメージについて、広報が足りないのではないかという感じがしますので、PRの仕方をもっと出していきたいという気がします。

以上です。

[委員]

まず、全体から。

非常に先生方が、頭が下がるぐらい行動されていると思いますし、教育がいきわたっていると思いますので、それに対して、非常に感銘いたしました。

ただ、それにとまって、クラブ活動等も含めて、先生方が力尽きて廃人になるのではないかと思うぐらいで、大丈夫かなと心配です。

自分の研究をしなければいけない、教育・指導もしなければいけないということで、高専の先生方は、相当のパワーがないと務まらないようで大変だなというのが、第一の印象です。

それから、寮についてですが、最近、東京などの大手企業でもそうなんです、寮に対

するイメージというのが、見直しをやっているところもあるようで、個別に住むというより、寮で先輩方が指導して、社会人・企業人として先輩方が指導するというものが、会社の文化等を醸成していくうえで重要だという話もあるようでして、見直しなどからすると、寮の中で確実に先輩方から指導してもらうような仕組みを継続してやっていただけないかなと、もしくは、同室でもそのような形があってもいいのかなという印象を持ちました。

講座とか地域連携とかを考える場合に、地域にどのようにして学生を残すかということで、我々も一緒になってやっていけるかという部分で、仕組みなり仕掛けを作っていくのが一番重要だと思います。

実は、地元の中小企業さんは、高専さんは敷居が高くて募集できないというのが現状です。三菱さん、SSKさん、大島造船さん等を含めたそれなり大手さんじゃないと求人表さえ書けない状況だと思いますので、1名でも2名でも、地元はどうやって残していくことを、先ほどの講座を見直すとかいうところを含めて、一緒になって考えていく必要があるかと思います。

1つだけ言うと、佐世保地域は造船が盛んなのに、船舶工学がないですね。実際、日本全国で船舶工学というものがまったく無くなって、私が聞いている限りでは、長崎総合科学大学さんに唯一残っているというところで、地元のある企業さんでは、自分たちで人を育てないといけないと動き出すようなこともあります。それで、海外に自分たちが出て行かなくてはいけないというところもありますので、そのあたりも含めて、ローテクで、昔ながらの工学というのがあるかもしれませんけど、その中に新技術、新しい発想があると思いますので、そのあたりも含めて考えて頂ければと思います。

以上です。

[委員]

本日は、遅くなりまして申し訳ありませんでした。

突然の来客があり、出るに出来なかったことがありまして、申し訳ありません。

私も、皆様と同じで、学生にとっては過保護なぐらい面倒見がいいなど、部活、寮生活などからも思いました。

NTCを通じて、かなり、高専さんには出入りさせていただいていましたが、知らないことが多くて。

寮が一番びっくりしました。

私どもも、寮・社宅をもっておりますが、新卒で入られているかたで、当然、寮に入ると思われる方でも寮には入らないという傾向が強いというのがあります。

正直なところ、高専の寮よりも費用は安いし、クーラーは付いているし、快的な寮だと思うのですが、そういう傾向のなかで、能力を上回るほどの入寮希望がある、5年になってもまだ入りたい人がいるというのは、正直、驚きです。

また、企業側にも責任がありまして、景気の波があつて、新卒を取れるときと取れない

ときがあつて、イメージとして造船業は過去のものという、長い不況がありましたものから、どうしても根がついていないのではないかと反省をしました。

じつは、新卒では苦戦しておりますけれど、ここ1、2年は、Uターン組でかなり、佐世保高専の卒業生を迎えることができました。

今後は、学校でなくOB会をまきこんで、企業側としても努力していきたいと考えております。

よろしく申し上げます。

[委員]

今までの話と重複するところもありますけども、会社であると、顧客満足、従業員満足、従業員の家族の満足というものがありますが、同じようにして高専をみると、学生顧客主義という言葉がありますように、学生には手厚すぎるほどの状況で、部屋にエアコンは入れんでいいんじゃないのかと思うんですが。

私たちのころは、本当に熱い中やっててですね、ここまで学生顧客主義に走らなくてもいいのではないかと思うんですが、まあ、それは学校の判断ですけど。

あとは、先生方の満足も必要となってくるということで、今のままの状況では、学生の面倒をみて、研究・開発をいろいろとしながら、大変なことになるのではないかと心配しました。

あと、ぜひ、図書館を充実していただきたいと思います。

ある先生から、図書館をみればその学校がわかるということを知りまして、学生時代に図書館をまったく利用しなかった自分がいうのも何なんですけど、今後は、学生に使えると胸を張って言いたいので、ぜひ、少しずつでも図書館の充実ということもやっていただきたいと思います。

佐世保高専、あと、街ごとの高専という場合に、高専ということだけで繋がりを感じる場所があります。それに、OBの方でかなり活躍されている方もおられます。そういった方が、私が仕事をするうえで、先輩たちの業績といいますか、仕事の結果として、今の仕事が出来ているという部分もありますので、そういったわけで、OBの方との連携強化のようなことも行ってほしいと思います。

それに関連して、50周年がありますので、そのときに、長崎大学は、大々的に行われて成功されたようですが、それに負けないようなかたちで、ぜひやって頂ければと思います。

以上です。

[委員]

もう10数年前だと思いますが、佐世保高専の女子卒業生に入っていたのですが、残念なことに、うちの会社に全国の通信社があるのですが、その支局の記者に取られて、残念だなと思ったことがありました。

その彼女を見て、挨拶はしますし、きちんと出来ていましたし、言葉遣いも丁寧ですし、見本だなという気がしていました。

先ほどから言われるように、僕らの経験も踏まえていきますと、高校、大学とか団塊の世代の終りの方なんですけど、これほど丁寧に慈しんでいるとといいますか、愛情をこめて育てられている教育機関ないのではないかと思います。それは、彼女を見て、そう思っていたのですが、1年2年は、寮に入らなくてはいけないと。よく考えてみたら、15歳ですから、その時代は、年がひとつ違えば、本当の兄貴みたいな感じだと思います。このような、高専の特徴として、15歳から20歳までいる、幅広い世代がいるという特性をもっともっと生かして、育てていただければと思います。

しかし、今日、説明を受けまして、本当に先生方が一生懸命にやられているという気持ちかひしひしと伝わってきた、そのような感じであります。

これをもちまして、講評に代えさせていただきます。本日は、ありがとうございました。

[委員]

今回、確認できなかったのですが、前回の外部評価の中でいろいろな提言がなされていますけれども、その結果がどうであったのかがぜひ欲しいなと思いました。また、今回、いろいろな話がでると思いますし、それが、どのようになっていったを次回の外部評価のときにまた出していただければと思います。

それから、いろいろな内容を説明をさせていただいて、大変だということはよくわかりましたが、全体的に、私の職業柄なのですが、Plan、Do、Check、Actionというサイクルがちょっと見えにくい。先生方がいろいろな取組みをされていることが、どういう計画に基づいて、こういうようなものやっていて、基本的には目標・方針に基づいて計画を立てて、どのような行動をして、チェックして、問題があれば改善をする。クリアされていけば、もうワンステップ上に移行するとか、そういうPDCAがちょっと見えにくいなという感じがしました。

それから、これから先、高専が生き残るためには、地域連携がどうしても大事になると思いますので、なにしろ地元に残ってもらいたい、地元で1人でも就職してもらいたいというのがありますが、そこまで、なかなか時間的にいかないのであれば、地域の企業さんといかに連携して取り組みをするのか、これは、久留須先生のところが窓口になると思いますが、地域との連携をぜひ強化していただきたい、佐世保高専は敷居が高いという意見も出ていましたが、ここもぜひ改善していただきたいと思います。

私も他の企業を回ったときに、航空高専のほうに設計を発注しているという企業が佐世保市内にあるんです。で、佐世保高専を使ってくれないんですかと言いますと、やはりちよつとという話がありました。

ぜひ地元と、どのように連携をとるかということを考えていただきたいと思います。

そのためには、高専の宣伝をいかにやっていくかが大事だと思います。

他の委員の方も述べられましたけど、高専は宣伝が下手と思います。もっともっと、宣伝を上手になっていただきたいと思いますので、なかでも、OBを活用しながら、学内・学外、使えるところを使いながらやっていただきたいと思いますので、よろしくをお願いします。

[末岡委員長]

はい。ありがとうございました。

最後に、私から話をさせていただこうと思います。

佐世保高専は、九州内でもかなり良い教育をされているということは間違いございません。それと同時に、GP等を取って、それに対して活動していच्छやるところも一番良い高専ではないかなと思います。

例えば、今日、話があったなかで大学から見て困ると思うことがありました。

1つは、大学の学部定員・大学院定員が110%を超えると罰金が科せられます。こういったことから考えますと、編入学という話がありましたが、間違いなく大学側がこれを絞ってまいります。そういったことで、どうするか、どのように変えていくかということを考えていただきたいと思います。

このような話があります。

8 大学工学部長会議です。高専がいろいろな大学に編入学をする。ここをちょっと抑えようかなとしたときに、ある大学が言いました。「試験に英語を課す。」とすると、高専からとたんに来なくなる。と。

ですから、全国的に言われている事なんですね。そういうことを、大学側が挿んでしまうということもありますので、注意を願いたいと思っております。

もちろん、TOEICとか、大学より年齢が低いですから不利であることも間違いありませんが、そういったことをやられることがございます。

それから、1年生のときにうまく具合に教育されたのか、先生方の熱心さでもって、留年者・退学者がでないのか、これは、本当に調べてみたいなと思いました。1つは、座学みたいなものを一生懸命しますよ。と。これは、ダメなんですよ。今日、話されたのも、「一生懸命わかるように、単位が取れるように一生懸命やりました。」と、いうのもダメだと思います。

どこが一番重要かということ、学生さんと教員が1対1で過ごせる時間を持つということ。そして、学生さんが「高専の先生はこういうことなのか」と、一緒にやる。ですから、我々のところだと、1教員が3名の1年生を持って、高校を出たとたんということですけど、5ヶ月間、何かを作ったり、何とかしながらやっていく。そうしていくと、いつの間にか、先生が遠くならない。近い。

大学で一番困ったのは、ミスマッチングで、どういった現象が起こるのかということ、ゴールデンウィークが終わると、パタッと大学に来なくなる。

こういったことが、完全に無くなります。

そういうことで、「また、先生うるさいこと言っとるな」となると困るのですが、やはり、少人数のところやる、1対1でやってみるということです。それもひとつの手だなと思っております。

それから、いかにして地域的にリクルートを図るかという問題ですが、男と女というのは、半分づついますが、女性を高専に入れる、女性を大学に入れる、女性を工学関係に入れる。

これは、今から、大学・高専、お互いに間違いないですが、絶対にやっていかなければならないことだと思います。

特に、女性が高専に入りますと、地域性が出てくる。遠くにはあまり行かないということがあります。こういったことが、うまい具合に転がればよいのではないかと思います。

ですから、女性が大学に来るためには何なのだろうということを、ぜひ、考えてみていただきたいと思います。今日は、トイレを事例に挙げられましたけど、もっと良いアイデアを何か考えていただければと思っております。

他に、GPを取っていらっしゃいますよね。だんだんと、その期間が無くなりまして、終わります。このときの、自立化ということが、お金のこともあるでしょうし、問題になってくると思います。

今日、お話を聞いておりますと、21年度では、2学科を中国に連れて行って単位化をするという話だったと思いますが、これも1つの自立化であろうと思ったんですが、これまでお金もらってたからやるけれども、無くなったからやめますと、こういったことは、言えませんから、かなり努力されているだろうと尊敬をしているところであります。

それから、広報の件です。

やはり、今からの目玉です。今日の説明では、対象が誰なのかあまりよくわからない。内容はこういうことですよといったことはわかりましたけど、この広報では、誰を対象にするから、表現はこういうことにしようといった、かなり区別をせざるをえないと思います。

ですから、中学生に言おうとしているのか、それとも、高専の紹介という言葉が出てきましたが、私はあまり区別ができませんでした。やはり、紹介するにも対象者がいますので、それによって変わってくる部分があるのではないかという気がします。

すごくうまくいっているという、おもしろ実験大公開。これは、ビジネスにしなければいけませんから、どのようにしたらいいのかも考える必要があると思います。

参加人数が多かったからいい、少ないから困ったということでは、いけないと思いました。

それから、地域連携に関してですが、教育にも、研究にもということで、これは高専の良いところだと思います。

リクルートの方は、私は大学におりますので、地域に就職するということは、我々では

ありえないことでもあります。「海外にでも行け。」という感じでありますので、これについては、コメントを控えさせていただきたいと思います。

今日、説明があると思っていて無かったことが、授業アンケートをいかにして活用されているのかということに関して、説明が無かったので、うまくいっているから留年者・退学者が少ないというような、何かしらのストーリーがあるのではないかと思っていました。

以上でございます。ありがとうございました。

閉会挨拶

[井上校長]

非常に長い時間に渡りまして、外部評価委員会としまして、私どもの話を聞いていただき、また、大変貴重な提言をたくさんいただきまして、ありがとうございました。

私どもがあわてて発表した点で、いくつかコメントいただいた件で、特に広報についての意見がありましたけれど、「こんなこともやっています」といったこともあったとは思いますが、私どもとしまして、1つ1つ丁寧に、伺ったご意見を参考にして、改善していきたいと思えます。

委員から、前回の評価をどう生かしたかと言われましたが、前回の評価から、今回のことをやってきましたので、「PDCAが見えない」とのご意見もありましたが、1つ1つこういったことを考えながら、改革を進めております。

そのほか、例えば、授業アンケートをどう生かしているかといった話がありましたけれど、学生による評価の点数が悪い先生方には、教務主事から注意がある。そこまでやっておりますので、年々、学生による評価が上がっているということも事実でございます。

これも、PDCAだと思っております。

貴重な意見としまして、やはり、「女性を高専に入れて下さい」という部分です。これは、まさに、おっしゃる通りでありまして、むしろ、私どもは全国平均でしかない、増えていないというところも大きな問題だろうと思えます。

それから、下級生と上級生の年齢差を活かしてほしいとの意見がありました。このことが、もっとも活きているのが課外活動だと思っております。最近、特にGPを入れてやりだした、キャリア教育におきまして、上級生をファシリテーターとして使って、下級生にキャリア教育をする。そうすると、上級生側からも、**Teaching is Learning**.といったかたちが取れますし、非常に年が近いということもありまして、効果も高い。そういったこともやっております。そういうことも、足りないのかもしれませんが、今日いただきました意見を参考にしながら、ちょうど今、次の中期計画をまとめているところでございますので、そのなかに、今日のご意見等も取り入れて、よりよい高専にしていきたいと考えております。

本日は、ありがとうございました。

Ⅱ 評 価 結 果 報 告 書

評価結果報告書

1. 評価点

	末岡 委員	池田 委員	松山 委員	高尾 委員	永田 委員	廣津 委員	北口 委員	才木 委員	朝永 委員	平均
学生(本科)の教育について	5	5	5	4	5	4	4	4	5	4.6
専攻科の教育について	4	5	5	3	5	4	4	4	4	4.2
学生生活について	5	5	4	5	3	4	5	4	5	4.4
学生の寮生活について	4	4	4	5	3	5	5	4	5	4.3
地域連携及び産学官交流について	5	5	3	4	4	2	4	3	4	3.8
広報活動について	4	4	4	2	3	3	4	4	3	3.4

評価点	評 価 基 準
5	優れている。 (あるいは、)適切である。
4	やや優れている。 (あるいは、)ほぼ適切と言える。
3	普通。
2	やや劣っている。 (あるいは、)あまり適切と言えない。
1	劣っている。 (あるいは、)適切でない。

意見・提言

外部評価委員から委員会終了後、後日提出いただいた評価結果報告書のご意見・ご提言を次のとおり示します。

項目1. 学生(本科)の教育について

(末岡委員)

体験学習方式による実践的なものづくり教育を行っている。高専の学生の弱いところは英語能力であるようだ。

推薦入試は中学校との定期的な連携活動を行い、信頼性を維持しないとじり貧となる。一般入試と推薦入試の入学後・卒業後の統計を取ることも必要である。社会からの要望、社会からの輩出学生の評価は非常によい。

中学からの成績の良い生徒が入学しているが、さらに入試倍率の向上に向けて、女性の入学を推進していただきたい。これが、また地元への就職や地元へ戻ってくることに繋がる。

新入生を教員あたり2~3名をつけて、座学ではなく、教員と直にふれ合う時間をもてる創成科目を実施するとさらに生徒の勉学意欲が湧くであろう。

(池田委員)

優秀な中学卒生が有能な教員集団によってきめ細かな指導を受け、丁寧に育てられ、またキャリア教育も充実しているなど感銘を受けました。ただ、過保護になっていないかを心配していました。

(松山委員)

よく努力されていると感じます。見習うべきところが多いと感じています。5年間の生徒は、かつての中学校の雰囲気があればと思います。部活動という話が校長からありましたが、それ以外の分野での活用ができればと思います。文科系等でも。

地元に残すということは県としては望むでしょうが学校としてはそれほどの魅力がないことも分かります。ただ、地域の発展には少しは貢献すべきではないかと思っております。工業高校も同じだと思っています。

昨年卒業式に出席させていただきましたが、生徒の雰囲気はかつての高専のイメージとは程遠いものがありました。地域全体での共通理解が必要であり指導が必要なのだと思います。もっと外に目を向けてということ私の学校も感じています。

(高尾委員)

・くさび型カリキュラムの導入による早期専門教育の実施や実験・実習重視の教育により、大学教

育に負けず劣らない内容になっており、学生を丁寧に教育されていると感じた。

・就職については、現在の県内企業への就職率は、高いとは言えず、学生へ県内企業の情報をより多く伝えていただき、学生の企業選択の幅を広げて、県内企業への就職率アップに繋げていただきたい。

(永田委員)

1. 教育目標が明確化し、入学者選抜や対策、教育課程も充実している。先進的取り組み；GPも取られ前向きに進められているが無理や負担増になっていないか心配。
2. 退学者・留年者が非常に少なく、先生方の努力と学生の質の高さと推察するが他校との違いをあらゆる角度からベンチマークしておいたらどうだろうか。(PR効果)
3. 長崎県と佐賀県の中学卒業者が殆どで特に県北佐世保市から40%入学していると聞いたが、地元への就職者が少ない。魅力ある企業がない？大企業が少ないという就職希望者とのミスマッチもあるかとは思いますが、一人でも多く地元就職するよう指導して欲しい。

(廣津委員)

当社の入社試験(筆記)結果からも大学(院)卒業見込み者と比べても全く遜色なく、レベルの高さは予め理解していたつもりであるが、今回の委員会でその確認ができたと思います。高等学校と大学の良い面を併せ持つ印象です。大学受験がないものの、よい意味での緊張感が継続されていて、教員も大学の教員よりは研究者としてよりも教育者としての側面が強いという印象です。英語力を不安視する声もあるが、課外授業(クラブも含め)カバーできないか。就職率がほぼ100%という点が高専の評価全体につながっていると思うが、やはり地元就職者が少ないということは問題であろう。当社の場合は近年Uターン者を採用しているが、企業もそこに目をつけなくてはならないし、学校としても支援するシステムが必要かもしれない。

(北口委員)

水中ロボットの画像がH16年と非常に古く、佐世保高専教員による優秀な研究内容のニュースリリース不足を感じました。

進級率が九州内他高専に比べ非常に高い事は、高い評価と思います。然しながら、学生の質を落とさず、どのような打ち手で、その結果を得る事が出来たか、また、先生方の苦勞を表す資料があればよかったです。

日中交流が活発に行われている点は素晴らしいと思います。中国に加えて+αとして、世界で最先端の技術に触れる事が出来る、交流を今後、少しでも良いので行って欲しいと思います。

(才木委員)

・九州内の各高専の退学者・留年者、進級率をみると、いずれもトップの成績(退学、留年は最小)を挙げられているように、教育目標に沿った、教職員挙げてのきめ細やかな指導ぶりがう

かがえる。

- ・入学者選抜では、大学などで相当の経験を積み、功罪についての研究・分析も進んでいるAOも考えていいのではないか。AO入学者の意識の高さが全体を引っ張り、底上げに貢献しているとの情報も散見される。一方、学力入試で一度落ちた生徒が翌年度、合格を果たし、同じように高い意識で一つ下の同級生を引っ張ってくれるとのケースも聞く。いずれにしても、入学者選抜の方法は、まだ改善の余地があるような気がした。
- ・生徒のモチベーションをさらに高めるために、可能なら大学などと連携し講義を受けるなどの、単位の互換性などもあっていいのではないか。

(朝永委員)

- ・一般科目と専門科目のバランス、教育体制、学生への支援体制などきめ細かに対応されていることがよく理解できました。他の大学の評価委員の方から「羨ましい」という言葉が出ていましたが、これらの結果が、退学・留年数の少なさになっているものと思います。
- ・専門性に加え、社会人としてのセンス、識見をどう育成するかキャリア教育の効果が期待されます。

項目2. 専攻科の教育について

(末岡委員)

複合型教育(ジェネラリスト)を取り入れたものづくり工学の実践を行っている。人に教えることは自分を見つめ直す教育機会と捉えている。特色のある演習・実験・ゼミを取り入れている。

学士取得率を向上させることが生徒にとっても必要である。

技術士1次試験合格者が技術士になろうとしているのか、目的は何か余りわからなかった。

高専卒業生は、努力家でまじめであり、実践的なものをよく知っているが、予想できないような成果を出すことはあまりない。

(池田委員)

- ・教育体制。特に、複合・融合型教育が素晴らしい。
- ・研究意欲のある修了生が比較的多いことも、素晴らしいことと思います。

(松山委員)

工業を志願する生徒には、英語が苦手というのが多いのが現実です。個人としては必要に

迫られると、会話はできるのですからそれ程心配していません。外国に伍して技術者として人間としての教育・一般教養をおろそかにしないことを忘れないようにしないといけないと思っています。

(高尾委員)

・実験・実習を通じた少人数教育により高度な高等教育が行われているが、英語力のアップが課題とのことであり、今後も、学生の英語能力の更なる向上も含めてきめ細やかにご指導いただきたい。

(永田委員)

1. 本科もそうだが専攻科修了学生の質の高さを企業、先生方から伺っている。中期目標に基づき専門課程が多く研究量が豊富であることそのレポートや研究成果、卒業研究を本科そして専攻科2回も行うことにより自身のレベルアップと自信に繋がっていると思う。
2. 就職だけでなくキャリアアップとして起業家を育てること、経営的センスを磨く時間を地域企業の先輩方(社長)と相談し増やして欲しい。
3. 企業へ3ヶ月以上の長期インターンシップを早急に導入して、地域との連携・融合事業に更に積極的に働きかけて欲しい。要望あれば一緒に企業訪問したい。

(廣津委員)

少数精鋭、客観的な指標となる JABEE に対応したカリキュラム、学士取得にも基準が設けられており、一般の大学よりも厳しいと思われる基準により運用されている点は非常に評価できる。専攻科が設立された際にかかなりの努力がなされたのではないかと思われる。問題となりうる点は一般的に認知されていないのではないかという点で、自覚されているようですが、地域、産業界との交流を活発に行う必要があるのではないだろうか。

(北口委員)

4項目の中期計画に対して、PDCAがわかる資料があれば良かったと考えます。

専攻科修了生に対する評価の一例は高い評価と思います。

(才木委員)

・充実した教育内容だと思う。実社会に入ってからの仕事ぶりはもちろん、知識、呑み込みの早さなど、大学卒より即戦力になりえると期待した。

(朝永委員)

・基本的な専門性のほかに、幅広い技術者としての力量を育てるために、地域連携への取り組み、海外との交流は大変有効だと思います。

・英語が弱いのは、高校生の受験英語と比べるとその差は理解できますが、英語への基礎能

力はあると思います。物おじしない意思疎通ができることがまず大事だと思います。自分の意思を伝える、意見を表明するなどを繰り返すうちに語彙が少ない弱みや、表現能力の弱点が分かってくると思いますので、積極的な会話や発表の機会を増やすなど必要ではないでしょうか。

項目3. 学生生活について

(末岡委員)

課外活動、学外活動などの活動は定期的に行われ、成果を出している。

社会人の第1歩としての学生指導も行われている。最近、学生が精神的な問題を抱えていることが多い。学生相談には十分に呼応していただき、早期対応をお願いしたい。

(池田委員)

課外活動を学生会会員に義務付けているとのことですが、高専では一般的なことでしょうか。(大学では考えられないこと)

(松山委員)

特にありません。

(高尾委員)

- ・学生指導について、きめ細やかな指導をされており、校内の学生についても、礼儀正しい印象を受けた。
- ・今後についても、クラブ活動などの課外活動と通しての経験は、人格形成において、重要と考えるので一層のご指導をお願いしたい。

(永田委員)

1. 非常に盛り沢山の行事が生まれ運営されており、先生方が教育だけでなく学生生活指導まで入り込んだ活動と取り組んでおられる状況にパワーを感じるが先生方の身体が大丈夫か心配である。
2. 余りにやり過ぎでないか、逆に甘くないか・・・厳しさと自由の二面性のバランス取り方の難しさを感じる。

(廣津委員)

部活動への加入率が高いことに驚かされた。高校ではこれほど高い加入率ではないと思われる。また、高専体育大会等でも好成績を収めていることは知らなかった。その他の行事も一

般の高校と同等かそれ以上に活発に行われている点が理解できた。

(北口委員)

全体的にバランスよく取り組まれていると思います。また、社会的な問題に対しても取り組まれていると思います。

どうしても、学校行事と言えばスポーツに焦点があたりがちですが、佐世保高専は技術系の学校なので、ロボコンなどの技術に関する活動に焦点を当てて頂きたいと思います。

(才木委員)

・スポーツ大会など、新聞で高専の名前をよく見る。頑張っていると思う。

(朝永委員)

・学生が、文化面・体育面双方で活躍しているのが、大変頼もしく思います。

・学生の指導/支援が細やかに行われていることがわかりました。入学とともに自立した学生として扱いを受けるので、自覚や自己規制など新たな経験をする中でのフォロー体制がわかりました。

項目4. 学生の寮生活について

(末岡委員)

寮内での学年間の交流などを行っている。寮での生活に対する教員の努力に敬意を表したい。現在において、男子生徒の入寮希望者が多いことはうれしいことである。女子生徒の入寮を促進することも、志願率向上と合わせて考えてほしい。

パソコンによる生徒への情報配信をし、授業内容・宿題・質問回答などに利用できると良い。

改修は早期に行い、厚生インフラの質向上を達成していただきたい。

(池田委員)

青春期の学生の生活指導、健康管理など学びたい。近年は若者のメタボリック・シンドロームも増えています。

(松山委員)

言わずもがなですが、この学生生活の規律の中で先輩後輩のコミュニケーションが培われ、人間としての成長があると感じています。生徒は苦しいでしょうが、寮の改善に取り組まれていることはとても大事ですし、掃除の指導が人格形成にとっても大事だと思っています。

(高尾委員)

- ・入寮希望者が多いという説明に、意外な気がした。
- ・最近の経済状況もあり、優秀な学生の確保のためにも、寮の重要性は増しており、冷暖房設備の改良など、よりよい居住条件の整備が必要と考える。

(永田委員)

1. ハード面の投資が必要だが、入寮したい人を出来る限り入寮させて欲しい。
2. 企業では社員寮の復活の話も聞く。文化・風土の醸成にはやはり先輩方からの指導や助言が一番大切ではないか。

(廣津委員)

一般には現代人は少子化などの影響で集団生活が苦手とされるし、文化系の私からは技術者(及びその卵)は個人主義的なイメージがある。収容能力以上に入寮希望者がいるということは、ある意味で時代に逆行しているようで興味深い。しかし、この傾向は歓迎すべき事なのかもしれない。古い施設であるが更新もされており、寮生会の運営も確かに為されていることの結果であろうと思う。教員による検食や巡回には頭が下がる思い。寮費を個別にみると違和感がないが、総額はそこそこの金額となり、学費と合わせて考えれば苦しい家庭もあるものと推察する。学費の免除や奨学金の活用でカバーできているのであろうが、何らかの援助手段がないものかとも思う。

(北口委員)

先生方の苦勞が多すぎるのではないのか? と心配してしまう程、非常に充実した内容になっていると思います。

当時何もなかった沖新寮で育った私は、社会人となり、便利な事が多く非常に嬉しい思いがしました。然しながら、現在のように便利な寮で育った学生は、社会に出た時、逆に不便さを感じるのではないかと心配致します。昔は何の設備がなかったので、良い意味で「免疫」が出来ていたので、社会に出て、少々の事は耐える事が出来たと思っています。然しながら、学生への満足度を上げる上では、ある一定の設備投資も止むを得ない事かも知れません。

(才木委員)

・中等教育で寮生活があるのは、最近では有名私立受験校などぐらいで、公立ではなかなかできないのが現状だ。かつての旧制中学、高等学校が知を育んできたのも、年が違う世代と一緒に暮らし、互いに刺激し合った寮生活を抜きに語れないものがある。他の教育機関にない高専のアドバンテージだと思う。施設も含めて一層の充実を期待している。

(朝永委員)

・高先卒業生が、企業に溶け込むのが大学卒に比べ良好といわれています。その背景に全寮制の効果があるのではとも言われています。環境にも恵まれ先生方、職員の方々のフォローが行われているのがよくわかりました。

項目5. 地域連携及び産学官交流について

(末岡委員)

総合技術教育研究センターを通じて、地域社会の発展と高度化に貢献する目的を有している。教員の過剰負担とならないように適正な規模で実施する必要がある。

高専の地域連携は、非常に重要である。事実、かなり実施している。しかし、就職先を地元にも求めなくても良いのではないかと思います。西九州テクノコンソーシアムと連携した人材育成は地域活動として実施していただきたい。

(池田委員)

産学官連携、地域連携を積極的に進めておられる。

(松山委員)

地元企業との連携は大事ですが、何を求めているのかを知っていないと空回りします。佐世保工業も高専との連携をしていきたいものです。技術的なものについて大いに教を請いたいものです。

(高尾委員)

・現在、地域貢献というのは、各教育機関に求められているものと考えますが、特に貴校の場合、県北地区に唯一の理科系高等教育機関としての役割は大きいと考えるので、積極的に地元企業のニーズをくみ取ることが重要と考える。

・出前授業については、件数を減らされているとの説明があったが、小中学生等が高等教育に接する良い機会なので、件数の増加が難しいならば、より一層の内容の充実等をお願いしたい。

(永田委員)

1. 高専が西九州テクノコンソーシアムという産学官民組織の中心的役割ではあるが、地域にとってなくてはならない存在感を出して欲しい。
2. そのためにはシーズ研究だけでなくニーズ: 出口を見据えた事業の発掘と取り組みが必要で企業や地域を考えると一次産業(農業・水産業)を含めた連携事業を模索して欲しい。

(廣津委員)

広報活動ともつながることであるが、資料・説明・数字上ではかなりの件数が行われているものの、一般的には殆ど知られていないのではないかと。特に、産学界との交流については努力が必要と思われる。NTC の活動がそろそろ大きな結果を出さなければいけない時期にも来ている。造船関連産業と連携すべきとの意見が出ていたが、当方も造船産業に身を置く者の一人として、連携のアイデアを出していきたい。

(北口委員)

基本指針の Output として、“「地域社会の発展と高度化」に寄与”と記載ありますが。そのための打ち手の内容は充実していると思います。然しながら、Output 目標“「地域社会の発展と高度化」に寄与”に対する達成度が数字的に判断出来れば Best と思います。その為には、“「地域社会の発展と高度化」に寄与”に数字的な判断材料を加えて目標とすべきと考えます。

(才木委員)

- ・出前授業など、工夫を凝らした地域交流は評価できる。リクルートにもつながる。
- ・地元就職という最終的な意味での地域連携をみると、学生と企業側のミスマッチ(佐世保高専総合技術教育センター報No.3)がどうしても横たわっている。教職員もおそらく他の高専との競争から、学生と同様に大企業志向であることは理解できないことではないが、地元の技術力アップのためにも有効な対策をお願いしたい。

(朝永委員)

- ・地域に役立つ高専という位置づけがまだ弱いと思います。西九州テクノコンソーシアムの取り組みがその窓口の一つになるように今後の連携が重要だと思います。
- ・高専は敷居が高いと地元企業から言われることがあります。地元企業の先入観を無くすためにも産学官交流の活発化が必要と考えます。他高専・工業高校のように企業と商品を共同開発する等は宣伝効果もあると考えます。地域協同テクノセンターの活動に期待したい。
- ・卒業生の地元就職が少ないなかで、企業との連携は、地元に向けた一つの効果になると思います。

項目6. 広報活動について

(末岡委員)

広報は高専の日常的な活動や入学者獲得に極めて重要なものである。

広報の対象者を意識してほしい。HPを中学生に見せるのか、中学教諭に見せるのか、それ

とも地域に公開する事項なのかななどの整理が必要である。

「おもしろ実験大公開」の地域活動貢献は評価できる。この来場者の増加をどのように捉えるのか。実施困難と考えるのか、これを如何にビジネスに利用するかなども検討していただきたい。

(池田委員)

- ・授業評価の教員へのフィード・バック(掲示板にもあり)と学生への説明がなされている。
- ・広報の充実:公共の施設、乗り物、媒体での広報も。

(松山先生)

広報活動に努力されていることはよく分かります。工業高校も同じですが、広報の方法をお互い知恵を出し合うことも必要なのかも知れません。

HPは必須条件ですが、関心を持たれた時に調べるものですから、関心を持たせる方法が必要のように感じています。

マスコミの活用です。

(高尾委員)

- ・学校ホームページを刷新されるなど努力はされてはいるが、歴史ある佐世保高専の活動が県民にもう一步浸透していないと感じられる。
- ・著名な先生方の新聞、テレビ等マスコミへの露出を増やして、学校をPRするのも一つの方法ではないかと考える。
- ・名物教授を発掘してはどうか。

(永田委員)

1. 高専のPR、知名度アップに更に取り組んで欲しい。
2. HPがリニューアルされ、非常に見易い環境になったと思う。

(廣津委員)

HP、広報印刷物、ビデオなど一通りのメディアは活用されている事は理解できたが、個性というか独自性が感じられない。このようなメディアはそもそも高専に興味のないものにはあまり効果が見込めない。広報イベント(おもしろ実験大公開)への来場者が年々増加していることはいい傾向で、このイベントを今後活用、発展させていくことに掛かっていると思う。

(北口委員)

計画に対しての結果は、自己評価されている通り、良かったと思います。然しながら、“広報”の定義からすれば、計画されている内容は局所的すぎます。佐世保高専の広報に関し、全体的な広報のガイドラインを作り、一目で佐世保高専の広報活動や流れがわかり、一人で

は佐世保高専の広報は出来るわけがないので、各々広報活動の責任所掌を明確にすべきです。

(才木委員)

- ・ホームページは驚くほど、充実していると思う。
- ・新聞ではよく高専がこういうことをしたという記事を見かけるが、TVではあまり見かけないようだ。TVはその日に放送され、翌日の新聞閲覧の動機づけともなる。TVへのさらなるPRが必要だと思う。

(朝永委員)

- ・いろいろな取り組みを行われていることが分かりましたが、もっと広報が行われてもよいのではないかと思います。少子高齢化、中高一貫校など学生の確保に難しい面が出てきますが、学校にアクセスしなければ確認できない情報のルートですから、一般のメディア(新聞・テレビ・放送・ミニコミ紙など)の利用を検討されたいかがでしょうか。

項目7. その他

(池田委員)

評価に際し、現地視察(施設、研究状況、生徒生活状況等)もあれば嬉しいです。

(高尾委員)

- ・委員会の説明において、各先生方から丁寧なご説明をいただいたのであるが、文章主体でなく、もっと写真等の映像媒体を使った説明をしていただいた方が更に理解しやすくなると感じた。

(永田委員)

1. 企業の場合は3Sの視点(会社(経営)満足度として学校経営・運営、顧客満足度として入学者と父兄、従業員満足度として先生方)が重要である。HP等でもその観点から手を打たれていることが見られるが、更に各々の視点から課題を抽出しその解決方法を内部・外部で今後も継続的に議論して対策を打って頂ければと思います。

(北口委員)

佐世保高専創立50周年記念式典を大々的に行って頂だき成功させて欲しいと思います。今回の外部評価員の意見で集中的に対処すべき内容を明確にして、実行に移せば、50周年式典の成功への道が開けると思います。

(才木委員)

・初めて外部評価委員をさせていただいて、高専ではこんなに手塩にかけ、丁寧に学生を育てておられるんだと実感できました。校長先生以下、教職員みなさまに敬意を表します。中高一貫教育が注目されるなか、その先鞭をつける形で、旧制中学の名残のある5年制というシステムを採用した高専の存在感は、全入時代を迎えレベル低下が指摘される大学と好対照をなし、ますます大きくなっていくのではないかと考えています。満身に挨拶も、会話もできないような若者が氾濫している今日、高専が目指す教科だけでなく、寮生活などで鍛えられた全人教育が真価を発揮する時だと思います。高専の存在感は燻銀ではないでしょうか。

特に評価できる点

(末岡委員)

現代 GP などの外部資金を獲得して高専特有の教育を推進していることは高く評価できる。特に、中国との交流及び地域連携に努力されている。これを留学生30万人計画による留学生教育と日本人学生の国際化に、教育システムとして利用できないか検討する時期ではないか。

現代 GP など、外部資金獲得が終了した後の自立化は重要な問題である。自立化のためのシステム構築が必要である。

(池田委員)

早期専門教育によって、立派な卒業生が育ち、社会で活躍している。

(松山委員)

広報活動や部活の活発さです。部活動は活発になればなるほど、学校全体に画期が出てきます。

(高尾委員)

・教育・研究ばかりでなく、学生の生活指導及び地域社会への貢献など学校側の負担は、増すばかりと考える。その限られた時間のなかで、多くのことに取組みようとしてされている学校側の姿勢に対して感銘を受けた。

(永田委員)

先生方の誠実で真剣に取り組まれている教育とその実績。

(廣津委員)

- ・教育体系にはほぼ完璧で、問題点は見受けられない。
- ・教員の方々のご努力には頭が下がる思い。

(北口委員)

- ・進級率が九州内他高専に比べ非常に高い事
- ・専攻科修了生に対する評価
- ・設備が充実した寮

(朝永委員)

- ・キャリア教育支援、学生支援GP等の学生の生活を含めた支援体制

・海外留学経験の実施

特に改善を要する点

(末岡委員)

教育には良い教員が必要であることは当然であるが、有能な教員だけでは良い教育はできない。教育システムを如何に構築するかが重要である。

入学志願率の向上、特に女子学生の志願率向上の対策を行う必要がある。

学位授与機構から学士を確実にもらえるように教員は努力せねばならない。

(松山委員)

明るい雰囲気が必要です。校舎等が明るくなれば生徒も明るくなります。お金の話になってしまいましたが。

(高尾委員)

広報活動において、マスコミ等をもっと活用するなど PR に努めるできと考える。

(永田委員)

特に無いが、地元企業との連携をもう少し密にお願いしたい。

(廣津委員)

産官学交流。特に産業界との交流が必要か。過去のように産業界から高専へ人材の派遣ができれば早いと思うが、簡単ではない。

(北口委員)

・佐世保高専の広報に関する全体像を示す資料が必要。広報を高める→優秀な学生を集める事が出来ると信じています。

・図書館の充実とその活用。

・佐世保高専運営に対しての「経営」的な方針を加えて結果を追求して頂きたい。キーワードは、顧客(学生)主義、顧客満足度、資産価値、P/L、B/S 等と思われます。

(朝永委員)

・地域連携活動、PR活動

その他の提言・意見等

(※本校の将来に向けてのご提言・ご意見等がありましたらご記入願います。)

(末岡委員)

1 教員が学術論文へ毎年 10 件以上投稿しているというのは本当ですか。

大学への編入学に大きな変更が生じる可能性があります。大学において、現員を定員の 110%以内とする強い要請(強制)が科せられます。大学では学生の定員オーバーの要因として、定員を超えた入学者数・編入学者数および留年者数があります。さらに、大学院に関しても、定員オーバーを 110%に規制することが文科省から宣言されています。これらの事情変化を高専としてどうするのか、大学と高専のリンクの仕方を再検討する必要があります。

(松山委員)

今後とも、生徒の交流をしていければと思っています。

(高尾委員)

・女子学生の比率が低いと考えられるので、出前授業等を通じて、理科系のおもしろさを小中学生にアピールしていただき、今後、女子学生の入学を促進していただきたい。

(永田委員)

1. 繰り返しになるが、地元企業への就職率を1%ずつでも高めて欲しい。
そのためには、企業との共同研究や定期的訪問、意見交換を増やす活動からかと思う。
必要であれば県財団として協力は惜しまない。
2. 本科4,5年生と専攻科で地域に根ざしたコースの開設をお願いしたい。特に、「船舶工学」など。地元企業の中でも造船に関わる企業も多く経済の波は確かにあるが、確実にその素養・基礎を有した学生のニーズは高い。(自動車のハイブリット化そして燃料電池化の流れは造船への展開されてくることが予想され確かな基礎力と設計ほか高度化;3DCADなどがポイントになってくる)

(廣津委員)

人材交流の一環として、例えば修士号を持つ社員を 1 年間の講師、助手として受入れができないか。また、逆に、高卒社員を学生として 4 年次に入学させることはできないか(会社入社後 3 年位、20 歳前後の社員)。

地元への就職者が少ない状況であるが、U ターン希望者はかなり多いのではないかという実感がある。OB 会などで仲立ちができれば、二次的ではあるが地元就職者がかなり増えるのではないかと思う。

(北口委員)

受験理由や県内工業高校との連携事業に関しては、佐世保高専の「強み」です。もっとアピールする必要があります。

佐世保高専の価値を高めるため、OBのネットワークは必要不可欠です。OBの方の頑張り・実績があるからこそ、高専卒業後の恩恵を受ける事があります。卒業したOBでも技術士取得者はいます。OBネットワークを構築して、佐世保高専の強み、としてアピールして欲しい。

学生は、地元就職に関し興味が非常に薄いと思います。何某かの理由があり、地元就職に注力するよりは、長崎に戻る際にスムーズに就職が出来るシステムを確立すべきと思います。

色々な目標は数字的な判断材料を加えないと結果が明確でなく、PDCAの循環が出来ません。目標・指針等については、数字的な目標を追加下さい。

(朝永委員)

- ・地域の企業や団体と共同研究を行うような地域に貢献する佐世保高専の一つの顔を作っていく必要があると思います。
- ・技術系教育機関として、現場と最新技術と十数年先の基礎技術がが学生に提供できるような学業の場となってもらいたいと思います。
- ・マネジメント能力の向上の部分にも意識してもらいたい。技術経営能力的な、総合的な視野を持つマネージャーとしての基礎的な教育なども必要ではないでしょうか。

Ⅲ 外部評価委員会資料